

「老・病・死を生きる」

今現在、私は名古屋にある同朋大学に在学中で、専攻は仏教ビハーラです。ビハーラとは、人生の終末の問題を考えることが主なのですが、何よりも人間の根本課題である「生老病死」に向き合うことが求められています。

私達人間は、「思い通りに生きたい」、「知っているという愚かさ」の中で生きています。ある時、「仏さんはどこにいらっしゃるのですか？」と尋ねたら、「足の裏にいらっしゃる」と答えられた先生がみえました。何故足の裏かと言うと、「私達は常に自分の思い通りにしたいと望みながら生活しているが、それは言い換えれば、仏様を道具にしている、足の裏で踏み付けている生き方なんです」と。「仏様を大事にしている」と言いながら、私の救いのための手段、方法の仏様になっているのです。仏様はこのような私達の在り様を「無明（むみょう）」だと。すなわち「何でも知っているつもりになっている愚かな姿である」と教えてくださっています。

自分のことならよくわかると思っても、これから必ず迎えることになる老・病・死についても、実はあまりよくわかっていません。それなのに、そのような問いを持つこともなく生きているのです。

このような末法無仏（まっぽうむぶつ）の時、五濁悪世（ごじょくあくせ）を生きる私達を救ってくださるのが念仏なのです。七高僧の中に道綽（どうしゃく）という方がおられます。中国のお方でずーと玄中寺（げんちゅうじ）というお寺で念仏をして一生を終えられました。道綽の伝説の中にこういうお話があります。お寺に来られる方々に、「小豆ひとつぶを柀に入れる時に、『南無阿弥陀仏』と言いなさい」と言われたそうです。最初は理解できなかった人も、時には小豆が欲しくて来た人も、生活の中で何故「南無阿弥陀仏」と称えるのかが疑問になってきた。そこで、問いを持つ身になったというのです。結果、念仏の教えが広まることとなり、毎日読経が続いて山中に響きわたっていた、という言い伝えが今も残っています。

念仏とは、「生活の中で救われるはずのない私という目覚めの極みにおいて我が名を称えよ。阿弥陀仏に南無せよ」という声が響いてくるのです。

最後に、皆さんよくご存知の「孫悟空」は、空（くう）を悟り何でも自分の思い通りになる如意棒（にょいぼう）を持ち、自分の考えた好きな人生を生きた猿ですね。でも、どうですか？結局は、お釈迦様の手の中でした。この世の「如意」では生きられません。「不如意」なのです。